



■ フォトエッセイ ■

インド・時代を生き抜く人びと

— タール沙漠の縁辺から —

写真・文 小西公大
Kodai Konishi

● 沙漠に生きる人びと

砂まじりの熱風とすべてを焦がしてしまっかのような強烈な日差し。太陽が姿を消せば一転、青白い月の光だけが頼りの果てしない闇ときびしい冷え込みが訪れる。インド北西部、パキスタン国境付近に広がるタール沙漠には、こうした過酷な自然環境のなかで生活する人びとがいる。私は、二〇年あまりこの地に通い、沙漠の居住者の生活を追いかけてきた。調査の対象としてきたのは、同地で「トライブ」というカテゴリーにより認識されている「ビール(Bil)」の人びとや、ムスリム(イスラーム教徒)の楽土集団であるマーンガニヤール(Manganiyar)の人びとである。とくに九〇年代の経済自由化以降、急激なグローバル化の様相が目撃されてきたインドであるが、タール沙漠の縁辺に生きる人びとにも、その影響が多様な形で浸透しつつある。この、地理的にも社会的にも周縁化された人びとの生活を通して眺めるとき、インド世界の変貌はどのように見えるだろうか。

● 沙漠に訪れた社会変動の波

ビールやマーンガニヤールのようなトライブやムスリムの集団は、本来「カースト社会」とは別個の社会を営むと考えられてきた。だがタール沙漠において彼らは、カースト関係を含む広範な集団関係に深く埋め込まれ、有機的な社会を形成してきた。この地に特徴的なのは、ラージプート(Rajput)と呼ばれる王侯氏族の末裔たちが社会・経済的な中心を担ってきたことである。現在の州名ラージャスターン(「王の地」の意)はもとより、独立以前にはラージプーターナー(「ラージプートの地」の意)



ビールの少女。ペットとして大切に育てている子山羊とともに



石材産業で働くビールの男性とその子ども

では、パトロンと生業を失い、路頭に迷った人びとは現在、どのように暮らしているのだろうか。結

きる。

と呼ばれていたことから伺えよう。「伝統的」に、ビールの人びとは、王権（パトロン）のもとで村落の守護や農業・牧畜における労働、有事には戦士としての役割を發揮し、ムスリム楽士集団たちは、王族の儀礼や祝祭時に折に触れて器楽演奏や歌謡を供するというように、双方ともいわゆる「サーヴィス・カースト」として生計を立ててきた。

現代に至るまで、彼らが周縁化されてきた理由として、こうした王権を中心とする、比較的安定した社会構造が徐々に崩壊していったことがあげられる。一九世紀以降、貿易の中心は、大英帝国の開くボンベイやカルカッタなどの港湾都市へと移行し、通商の手段もまた、沙漠の交易路から新たに建設された鉄道網へと変わっていった。貨幣経済が急速に浸透し、経済的な価値観も一変した。そうして、東西貿易の中継都市として重要視されてきた沙漠の諸都市は衰退し、同時に、それまで培われてきた強固なコスモロジーや社会・経済関係も崩壊を余儀なくされた。ビールの人びとが戦士として必要とされるような、王権同士の支配権をめぐる戦争も起きることはなくなった。一七、一八世紀にかけて、王権と交易に支えられ隆盛を極めた社会は、近代化の波のなかで「過去の遺物」となったのである。また一九世紀末には、相次ぐ早魃^{かんばつ}や飢饉がこの社会を襲い、不安定となったパトロンの庇護から投げ出された人びとが新たな生業を求めて移動を始めた。今日彼らを取り巻く貧困の根幹には、こうした旧来の社会構造の崩壊という歴史を紐解くことができる。

と



祝い事の席で演奏をするムスリム楽士集団マーンガニヤールの人びと

羊飼いの男性（ビール）。
羊の群れが道路を横断するときには、
人もラクダも車も立ち往生となる

タール沙漠における典型的な家屋。
チャーウラーと呼ばれる円形の小屋から構成される



中世の栄華を今に伝えるジャイサルメールの城塞と城下町の風景

論からいえば、彼らの生活を大きく変えたのは、沙漠の諸都市における観光化である。近代の産業構造が社会を席卷するなか、彼らの多くはその末端でたくましく生き続け、なかには大きな成功をおさめた人びとも少なくない。

●新たな生存戦略へ

私の調査地である沙漠の都市ジャイサルメールでは、とくに八〇年代以降に近代化・観光化の波が訪れた。都市の中央にそびえたつラージプートの城塞と、それを取り巻く城下町の建造物はすべて、この地で採れる良質な黄砂岩でできている。それらが陽光を浴びて金色に輝くことから、この都市は「ゴールデン・シティ」と呼ばれ、州政府による観光事業の目玉となっている。次第に観光地としての知名度を高め、現在では、世界各国・国内各所から、年間六〇万人のツーリストを吸収している。宿泊施設やレストランなどの増加も著しい。なかでも人気が高いのは、同都市を中心に、周縁の沙漠エリアをラクダにのって周遊する「キャメル・サファリ」と呼ばれるツアーである。安定した収入源をもたなかったビールの人びとは、このツアーにおける「ラクダ使い（キャメル・ドライバー）」として観光業にいち早く参入し、生き延びてきた。また、同地で産出される黄砂岩の、建材としての需要が増すことで、採石産業における労働力としても重宝されることとなったのである。

一方で楽士集団のマーンガニヤールたちは、観光客用に設けられたホテルやコテージ、レストランなどでの演奏依頼が増え、本業から離れていた人びとも再び楽器を手にするようになった。いわば、国内外のツーリストが、新たなパトロンとなったのである。さらに九〇年以降、世界に散らばる「ジプシー／ロマ」をめぐって、その起源がタール沙漠の楽士たちであるとする一九世紀の議論が再燃しブームとなり、世界的な脚光を浴びる



ジャaisalメールの旅行代理店。
 キャンメルサファリのルートが描かれた看板を囲んで

弦楽器を奏でるサーカル・カーン氏。
 インドの人間国宝であり、世界的に知られるアーティスト



こにし こうだい／東京外国語大学
 現代インド研究センター

南アジア人類学を専攻。博士（社会人類学）。
 2004年から2006年にかけてデリーのネルー
 大学に留学。インドの周縁部におけるフィー
 ルドワークから、社会空間、女神信仰、芸能
 世界などの研究につとめてきた。



サファリに出発する観光客と、キャンメルドライバーとして先導するビールの青年

こととなる。これに乗じて自らを「沙漠のジプシー」と表象し、欧米のプロデューサーが付けば、海外公演や映画出演を果たすなど、グローバルに活躍する人びとも出現していったのである。昨今インドについて語られる際には、とりわけ九〇年代以降のグローバル化による変化が強調される傾向がある。しかし、トライブやムスリムを取り巻く環境の変化はむしろ、植民地期から連

綿と続く社会変動という大きな流れのなかで捉えるべきであろう。彼らはそうしたマクロな時代の変遷に翻弄されながら、移動を繰り返して、その都度新たな生活の糧を探し求めてきたのである。今日なお、彼らの生活水準は低く、教育レベルの向上率も芳しくはない。それゆえ、彼らは「後進階層」とされてきた。しかし、沙漠という過酷な自然環境に置かれた人びとの生存戦略や適応能力と

いった微細な側面に光をあてた時、彼らの強かさや生きるための意欲や智慧を見出すことができる。近代化、そしてグローバル化という過渡期を生き抜くなかで、彼らが周縁からではなく中心から世界を眺め、語りかける時代は遠くないのかもしれない。その時が来ることを願いつつ、これからも彼らの生きる世界を見守り続けていきたい。